

フレーベルの恩物研究（第18報）

—園庭について—

莊 司 泰 弘

Study of Fröbel's Gifts (No.18)

— über die Gärten für Spielgaben im Kindergarten —

Yasuhiro SYOUJI

(Received September 28, 2001)

はじめに—現在、「フリードリッヒ・フレーベル博物館」(Friedrich Fröbel Museum)のあるバート・ブランケンブルクの地に、「自己教授と自己教育へ導く直観教授のための施設」という名称の教育遊具製造販売施設がフレーベル(Friedrich Fröbel, 1782-1852)によって1837年に創設された。ブランケンブルクの施設でフレーベルは、「積み木」(der Bauklotz)として知られる、創造活動によって知識を取り入れる遊具を考案し、様々な作業によって心中のイメージを表現する素材を作業具として編集したのである。フレーベルは1839年に近隣から子ども達を集め、遊具による自己教育の実習を始めた。若い母親や女性のために、現在の保育者養成に相当する「幼児教育指導者講習科」を開設し、実習施設として「遊びと作業の施設」を付設した。1840年に遊びと作業の施設は、キンダーガルテン(子どもの園)と改称されて現代に至っている。子どもの創造的活動である遊びに着眼し、子ども達同士の自己教育を援助する教育施設をフレーベルは意図していた。しかし、キンダーガルテンは単なる遊具による遊びをする施設ではなかった。晴れた日には屋外で遊び、園庭で「労作」(die Arbeit)をしたり、散歩や自然環境に関わる活動が大切にされていた。むしろ、外遊びに適さない日に遊具や作業具で遊んだのである。すなわち、外的世界である自然に即して子ども達を養育しようとする「合自然性」(die Naturgemäßheit)に満ちた環境を提供し、自然に内在する神の摂理によって、人間教育を神に委ねるための施設なのである。

子どもが自己の内面(神性)を自由に自発的に表現した活動が遊びであり、遊びによって神性(対立物を調和させる神の不断の創造性)を確認する施設がキンダーガルテンであった。フレーベルは1839年11月11日にドレスデンからルイゼ・レビン(後のフレーベル夫人)に宛てた手紙の中で、「1840年春、ブランケンブルクからカイルハウへの散歩の途上、キンダーガルテンという

名前が浮かびました。天国の園、もちろん、子どもの園、子ども達に再びお授けになり、与えたもうた天国」(Schrücke:1912)と記述している。フレーベルにとってキンダーガルテンは子どもの手に戻されたパラダイスであり、天国の園で遊ぶ子ども達の姿を通して両親や人類を神に再帰する施設でもあったわけである。キンダーガルテン(子どもの園)は、名称の示す通り、園や庭という豊かな自然環境による人間教育を意図している。自然環境に内在する神の摂理によって、環境に関わる力(自己教育力)が建設的な方向(生命合一)に調整されることになる。

フレーベルのキンダーガルテンが日本に紹介され、幼稚園として動き出した時、3つの勘違いが起きた。1つ目は、教師が大人としての権威をもって指導する場になったこと、(異年齢交流の場による試行錯誤しながらの学習環境)、2つ目は、保育が授業の一環として部屋で行われたこと、(天候や都合の悪い日だけ部屋を使い、大半は屋外で保育した)、3つ目が、園庭ではなく運動場が作られたこと、(単なる運動の場ではなく、生命と関わる環境であった)なのだが、日本では園庭の有する意義が理解されていなかったと言えよう。『同志と同一の協力のもとに活動している者のための日曜紙』に掲載された「キンダーガルテンにおける子ども達のための庭」(Der Garten für die Kinder im Kindergarten)という論文の中で、「もし、私達がキンダーガルテンという語に隠されているものに注意を払うならば、キンダーガルテンという語は、私達に自らキンダーガルテンの方法と手段を問いかけているのではなかろうか。すなわち、子ども達の庭においてである。キンダーガルテンは、キンダーガルテンの全般にわたる完成された理念は、明確に表明されたキンダーガルテンの思想は、必然的に庭を要求し、庭の中に子ども達のための庭を必然的に要求する」(Fröbel:1850b)とフレーベルが記述しているように、フレーベルにとって、「庭」(der Garten)が提供する自然環境、庭が象徴する自然が自己教育を援助する環境の全てだったと考えられる。フレーベルにとって庭は単なる物的環境を意味しているのではなく、「幼いカロリーネが生まれ、最初の誕生日がきた時、家庭教師とホルツハウゼン家の子ども達はある特別の象徴的なことをし始めます。花壇に『たくさんのユリの球根』を植え込み、花壇の上に日除けをかけ、日光が差し込むと、透かし絵のように『神の園』という文字が現れるようにしたのです」(Spranger:1953b)と、シュプランガーが記述しているように、フレーベルがホルツハウゼン家の家庭教師をしていた時代からの教育理念でもあった。自然による教育は神による教育を意味しており、人間教育は神によってのみもたらされると直観したフレーベルは、自己教育のための環境である庭を要求した。庭があってこそ自己教育手段である遊具の真価が発揮されるわけである。

合自然環境と園庭——フレーベル自身は人間が人間を教育できると考えることは不遜であり、人間教育は自然によってしか成立しないと考えていた。キンダーガルテンの実現されなかった前身案として「養育と発展の学園」について述べた箇所に、「上述した多方面のとても有益な発達状態によって、特に、最年少の子ども達の感覚や生命に馴染みやすいヘルバのとても教育的で健

全な、しかも、自然が美しい状態によって、また、これまでの多年にわたる私達の教育生活によって、何度も私達に出てきた要求を叶えるということが可能になり、特別な（母親と3歳から6歳までの男女の子ども達のための）**養育と発展の学園**を実施に移すということが私達に今や可能になるであろう。両開きの扉を備えた大きな家屋、目的にかなった家屋の広さ、大きくて、広々とした、全体が囲まれている家屋の前の中庭、すぐ近くにある果樹園などは、告示された国民学校と並んで、否、それどころか、2つの学園の本質的で内面的な要求のために、国民学校とある程度親密に連携され、養育と発展の学園の内部の家庭的設備においては分けられるが、孤児に対するこのような養育と発展の学園が、富裕な両親達によって、容易に成就され得るということを可能にしたのです」(Fröbel・Lange:1862a)と記述している内容は、フレーベルが**自然環境による教育**を重視していることを裏付けるものであろう。フレーベルは遊具や作業具で子ども達を教育しようとしたのではなく、「自然」(die Natur)に子ども達の教育を委ねたのであり、自己に内在する自然との合一衝動を満たす園庭環境を用意したのである。自己に内在する自然、すなわち、園庭という自然環境と子ども達を結びつける役割を遊具と作業具が果たすからこそ自己教育手段となるのである。

キンダーガルテンは単なる遊具による遊びをする施設ではなかった。晴れた日には屋外で遊び、庭園で労作をしたり、散歩や自然環境に関わる活動が大切にされていた。むしろ、外遊びに適さない日に遊具や作業具で遊んだのである。すなわち、外的世界である自然に即して子ども達を養育しようとする合自然性を提供する環境であった点が重要である。自然の状態では太陽に向かって真っ直ぐ育つ植物が、人間の手に渡ると、盆栽のように、切られたり、曲げられたりしてしまうことになる。そこで、フレーベルは人間教育を自然の手に委ねようと考え、指導（命令、制限、干渉）しないという「環境」(die Umgebung)による教育を提唱した。すなわち、野生の植物が種を拡げるために周囲の環境調整をするように、花に例えた子ども達に、フレーベルは「自己を教育する環境」(キンダーガルテン)を用意したと考えられるであろう。ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778)の思想影響を受けたフレーベルは、自然こそ人間に代わって子どもを教授し得るものであると考えるに至ったのである。合自然性に基づいてキンダーガルテンに用意された環境を感知し、自然有機体的関係において生じる子ども達同士の自己教授が、フレーベルの製作した自己教育手段の遊具に必要な合自然的環境であった。

1840年当時の園庭は「共同の部分」と「個人の部分」の2つの部分からなり、共同の部分は取り囲み、保護する部分であり、個人部分は取り囲まれ、保護される部分になっている。共同の部分は「野菜の庭」(Gemüsegarten)と「花の庭」(Blumengarten)と「耕地」(Ackerland)に分かれ、耕地には「スペインクローバー」(Spanischer Klee)「イガマメ」(Esparssette)「ムラサキウマゴヤシ」(Lazern)「ハキャベツ」(Blattkohl)「チリメンキャベツ」(Wirsing)「アカキャベツ」(Braunkohl)「シロキャベツ」(Weißkraat)「テンサイ」(Runkelrüben)「カブキャベツ」(Kohlrabi)「カブラハボタン」(kohlrüben)「ジャガイモ」(Kartoffeln)「ソラマメ」

(Puffbohnen)「ダイズ」(Bohnen)「カラスノエンドウ」(Wicken)「レンズマメ」(Linsen)「エンドウ」(Erbsen)「キビ」(Hirsen)「スペルトコムギ」(Spelt)「カラスムギ」(Hafer)「オオムギ」(Gerste)「ライムギ」(Roggen)「コムギ」(Waizen)「アマナズナ」(Leindotter)「アブラナ」(Raps)「ナタネ」(Rübsaat)「アサ」(Hanf)「アマ」(Lein)「ケシ」(Mohnen)「ヒマワリ」(Sonnerblumen)が植えられていた。「オオムギ」(Gerste)が耕地の一面を占めている。個人の部分は各々4平方フィート(0.37㎡)の正方形の土地で、本道は2.5フィート(0.76m)、間道は1フィート(0.3m)になっている。Paul、Anna、Fritz、Louise、Ernst、Molli、Marie、Karl、Tony、Franz、Emma、Peterの12人の名前がある。

屋外活動と園庭—— フレーベルにとっては、自然環境と接する屋外での活動が重要であり、園庭での遊びや作業が主たる活動であったことが特徴的である。むしろ、「季節や状況で、少年が家庭や学校での仕事を自由にできず、自分の力を自由に鍛えたり、発達させたりできない時があり、しかも、少年はどんな場合でも、何もせずにいられない。だから、少年時代には、あらゆる場合にも、屋内や室内での何か他の外面化する作業や表現を作らなければなりません。特に、機械的な仕事と言われているような、紙細工、厚紙細工、造形などは、少年の活動や少年指導の本質的な部分であり、また、労作は少年自身にとって極めて大切なものなのです」(Fröbel:1826a)とフレーベルが記述しているように、1826年当時のフレーベルは作業具を天候などの理由で屋外に行けない時の少年の屋内活動として考えていた。後に、労作浴として真の労作と造形の意義に気づくのだが、屋外の活動こそ本来の自然による教育の場であり、遊具や作業具での労作は副次的な活動とも考えられる。

フレーベルのキンダーガルテンは3歳から7歳の子どもを対象とし、最大50名まで受け入れ、3歳から5歳までと5歳から7歳までの子どもの縦割り編成方式を採っていた。水曜日と土曜日は9時から12時までの3時間、月、火、木、金曜日は、9時から11時と、15時から17時(冬季は14時から16時)までの4時間、1週に22時間の保育をしていたわけである。屋外で集団遊び、庭の作業、ボール遊びや球技をし、豆の部屋、縫う部屋、組む部屋、折(織)る部屋、切る部屋、刺す部屋、描く部屋、粘土の部屋などの用途別の部屋があり、積み木、色板、色棒、色糸、色紙、豆、粘土などの各素材を使って作業をしていたようである。30分単位で作業をすることになってはいるが、良い天気の時などは予定は変更され、屋外の活動になっていたし、5歳から7歳の子どもは各自の好みで作業を選んだり、好きなだけの時間作業を続けることができたという点が重要である。夏季は屋外で自然に親しみ、冬季は部屋での作業をすることが大切にされていたことが特徴的である。また、夏でもかんばしくない天候の時は室内で共同遊びやボール遊びをしたと考えられるであろう。(Pösche:1862a)キンダーガルテンの作業割り振りを見ると、フレーベルの縦割り編成で各作業部屋を子どもが選ぶ発想と、日本の横割り編成で時間割に忠実に子どもを一斉に指導した発想の違いが明確になるのではなかろうか。

夏季の作業割り振り	30分で1		冬季の作業割り振り
庭仕事	12	—	
物語や具体的な対話	6	6	物語や具体的な対話
組み立て	4	4	組み立て
共同遊び	6	6	共同遊び
粘土造形	2	4	粘土造形
編む	2	4	編む
ボール遊びや球技	2	2	ボール遊びや球技
		4	折る
		2	配置遊び
		2	色板でのデザイン(描画)
総時間数	17	17	(Pöschel:1862b)

	夏 季				冬 季		
	月 曜	火 曜	水 曜		月 曜	火 曜	水 曜
9-10半	物語や具体的な対話			9-10半	物語や具体的な対話		
10-10半	共同遊び			10-10半	組み立て	組み立て	色板デザイン
10-11半	休憩			10-11半	休憩		
11-11半	組み立て	組み立て	編む	11-11半	折る	折る	ボール遊び
11半-12	—	—	庭仕事	11-12半	—	—	共同遊び
12-12半	—	—	庭仕事	12-12半	—	—	配置遊び
15-16半	庭仕事	庭仕事	—	14-15半	粘土	粘土	—
16-16半	庭仕事	庭仕事	—	15-15半	共同遊び	共同遊び	—
16-17半	休憩	休憩	—	15-16半	休憩	休憩	—
17-17半	粘土	ボール遊び	—	16-16半	編む	編む	—
	木曜は月曜と同じ 金曜は火曜と同じ				土曜是水曜と同じ		
	(Pöschel:1862c)						

1週で17時間の作業であるから、1日約3時間の作業になるわけである。しかし、1日の時間帯を見ると、9時から17時30分までの7時間30分の間に、3時間の作業をしていたことがわかる。2時間の休憩時間を引いても、2時間30分の自由な時間があり、休憩時間も自由な時間であると考え、4時間30分の自由な時間に対し、3時間の作業であったという点は重要である。作業も5歳から7歳の子どもは好きな作業を選べ、好きなだけの長さで作業できることから、フレーベルの作業割り振りは子どもにとってはあつてなきに等しいものであったとも考えられる。

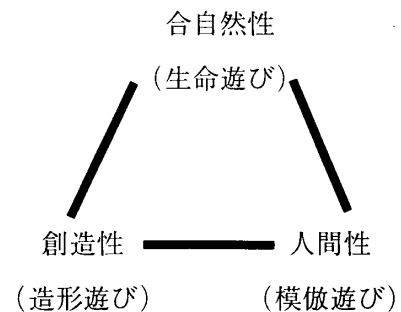
子どもの遊びに現れる人類最高の「感性」(der Sinn)とは、乳児期から示される共同感情と

言えよう。幼児期が感覚的知能の時期であり、感覚体験の積み重ねが予感する力（身体で考える）を強めるからこそ、様々な感覚体験を共有する能力が子どもには生得的に備わっている。したがって、異年齢の子ども達が同集団になることが最適の自己教育環境になる。すなわち、人間は仲間を作り、感覚体験を共有することで自己教育が可能になると考えられるであろう。園庭は異年齢の子ども達が交流する格好の場なのである。子どもの自己教育活動は、キンダーガルテンの異年齢同集団で構成された交流環境で、子ども同士の相互教育活動に発展する。『同志と同一の協力のもとに活動している者のための日曜紙』のNo.19とNo.20に掲載された「子どもの発展の継続とボールでの展開的遊び」という論文に示された第1遊具での共同遊びや（Fröbel:1838c）、「8月4日のマイニンゲンのバート・リーベンシュタイン近郊のアルテンシュタインでの子ども、少年、国民祭り」（Fröbel:1850a）（Das Kinder=, Jugend= und Volksfest zu Altenstein bei Bad Liebenstein in Meiningen am 4. August）に紹介されたような「共同遊び」（das Gemeinsamenspiel）と結びついてこそ、第1遊具は真価を発揮するのではなかろうか。幼稚園において、従来のように室内で、机の上で一斉に第1遊具を使うのではなく、自然環境が備わった屋外でのボール遊びが大切であると見なされうる。

ルソーの自然の教育、人間の教育、事物の教育、ペスタロッチー（Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827）の頭、心、手の思想を受け継ぎ、フレーベルの幼稚園教育学にも生命遊び、模倣遊び、造形遊びという3本柱がある。

園庭での遊びについて押さえておくことにする。

生命遊びと園庭—— 下記の2つの遊びと三位一体の関係にある生命遊びがフレーベルの目指した共通テーマと言えよう。具体的には動植物とのふれあいを通して得られる自然の摂理（合自然性）を確認し、人類の使命として合自然環境の維持



を教える話や活動になる。将来、子ども達が弱肉強食の競争原理を選ぶか、共存共栄の共同原理を選択するかに関わる重要な遊びなのである。「自己意識は人間の本質に属する。自己意識は人間の本質と同一のものです。自己を自ら意識するようになるということは、人間のライフワークのような、子どもの生活の最初の課題なのです。自己を自ら意識するという課題の解決のために、子どもは誕生すると同時にある一定の場所と対象物に取り囲まれ、生き生きとした全ての被造物の周りを吹き回る気に取り囲まれ、人間的、精神的な言葉に取り囲まれるわけなのです。それゆえ、活気づける言葉、少なくとも活気づける歌が、各々の自発的な作業や、子どもとともにする遊びのためにも付随しているのです」（Fröbel:1838b）とフレーベルが記述しているように、子どもを取り巻く環境には「生き生きとした力」（die lebendige Kraft）がみなぎっている。私達人間を含めた被造物には、製作者の創造性が宿っており、被造物同士の環境調整のための相互会話がなされていることになる。すなわち、フレーベ

ルの言う「生命を与える力」(die belebende Kraft)とは被造物間の調整活動と考えられるであろう。フレーベルはロマンティークの立場から、「各々の対象物は、たとえ、もの言わぬ言葉で語るとはいえ、事物の現れを通して、絶えず事物から、事物について人間に語りかけており、大人以上に子どもに語りかけているのです。まるで事物の生命を子どもの生命に結びつけようとするかのようです。それゆえ、人間の外面的発達のために、特に人間の内面的、精神的、心情的な発達のためにも、単に事物の現象によって環境を明瞭な言葉で語るだけでなく、むしろ、子どもよりも大人がもっと早くから導かれ、事物のもの言わぬ言葉を単に聞き取るだけでなく、さらに自分自身でも聞き取れるようになろうとするのは、全く本質的なことなのです。それゆえ、真っ先に注意深い母親が、同様に関与している保育者も、あなた方の人間的な感情に完全に忠実に試み、目に見える言葉だけでなく、このもの言わぬ事物に、早くから真の表現、理解できる音声表現、言語表現や歌の表現を与える試みをしてください。表現を与える試みによって、もの言わぬ静かな無言の生命が、音や言葉を通して子どもに近づき、音や言葉によってももの言わぬ生命の中に一層具体的なものを子どもはすぐに発見し、感じ、そして、認識することでしょう」(Fröbel:1838d)と記述し、子どもが生得的に有している直観能力に注意を喚起している。遊びによって、子どもは事物からのもの言わぬ言葉を直観し、事物の生命を聞き取っているわけである。しかし、残念ながら、私達大人は総合的感覚を忘れてしまったために、まず、聞き取れるようになろうとすることが必要になる。生命の律動性、無生物のリズムや生物との共同感情は、リズムでのみ聞き取れるわけであり、人間の言葉が持つ律動性、リズムから詩が、言葉とリズムから歌が生まれることになる。すなわち、詩や歌や言葉の持つリズムは、子どもの心情や発達状態へ働きかける手段ではなく、大人にとって子どものリズムを理解する方法であり、被造物の生命を聴き取る試みと見なされうる。子どもに内在している生き生きとした力や躍動的な力を表現するリズムを強化するために、フレーベルは詩を付加したのだが、残念なことに日本では詩と動きを別なものとして扱ってしまった。

『母の歌と愛撫の歌』の「塔の風見、又は、旗」という手関節と肘を動かす遊びの解説の中で、フレーベルは、「動いているものには動かしている元、動かしている力が根底にあることに気づき、じきに、生きているもの、生き生きとしたものには、生きている力、生き生きとした力、生命を与える力が根底にあるという結論に至るのです」(Fröbel・Prüfer:1911)と記述し、動かされるものにはもとになる力が働いていることから、今、目の前で息づいている物には生命を与える力が根底に働いていることを、子どもが直観するようになると論じている。フレーベルが考案した数々の手遊びや遊技、フレーベルの遊具や作業具、彼が推奨した動植物の飼育栽培の根底には、フレーベルの宗教哲学が流れているだけでない。むしろ、フレーベルは子ども達に自然界の合自然性や人類の使命を伝えるために遊びや遊具を創作したとも見なされうる。フレーベルの説く自然界は、力が統一（神）より発現して、全ての方向に均一に活動しながら万物に宿り、自発的に作用して万物の質となり、万物の素材が老朽化した際に、再び統一に帰っていく宇宙生命形

態の発想に基づいている。例えば、人間の身体に置き変えて統一を心臓、万物を細胞と考えると、力は体液のように統一と万物の間を循環していると見なされうる。力は統一より発してくるが、統一者は神であるから、フレーベルの力とは、万物と神を結ぶ道（回帰と誕生の経路）であると解釈できよう。

フレーベルが幼児の生活を取り巻く園庭に要求した内容は生命の法則を感知させる環境であることであった。個々の生命は神性の表現であり、あらゆる個々の生命から「神への道」が通じていること直観できる環境、神は創造した全てのものの相互の調和、神御自身が生きた統一として万物を創造したことを知らせる環境、全ての生命が根源においては神と一致することを予感できる環境、自然界における全ての生命は互いに相異なっているように見えるが、基を辿ってみると唯一の根源である神から生まれたものであることを確認できる環境なのである。

第3遊具や第4遊具は、屋外の砂場で使うと、すぐに山や川が砂で作られ、小動物が住む建造物や活気のある街になるし、大きな樹の木陰で野鳥のさえずりを聞きながら使うと、無味乾燥な室内で使った場合よりも遙かに子どもの感性が発揮される。生命に満ちあふれた自然環境のもとで使ってこそ、遊具は本来の魅力を発揮するのではなかろうか。

有機的で合自然的な人間関係は、屋外の自然環境を模倣することによってもたらされる。「子どもの生命と遊びを展開する全体としての活動遊び」と題して、フレーベルが『同志と同一の協力のもとに活動している者のための日曜紙』に掲載した論文には、「紐付きのボールから現れた活動遊び、同時に身体と四肢の一定の陶冶の観点での活動遊び」という内容がある。第1遊具のボールを持って屋外とする集団リトミックであり、(Fröbel:1838ac) 遊具は屋外でも使われていたことがわかる。知的な認識活動よりもリトミック、活動遊び、手遊び、飼育栽培などの作業にみられる身体による表現作業が、キンダーガルテンの時期の子どもの活動であり、保育室での活動よりも屋外での活動が多かったことが重要である。十分に遊び、身体で内面の創造性を表現してこそ、遊具や作業具の活動に反映されることが考えられる。室内の保育よりも屋外の保育の方が、子どもに環境に関わる力が要求されるのだが、現在の日本では、ピアノの弊害として、リトミックが室内のものになってしまい、活動遊びや共同遊びが保育者中心の室内のマスゲームになってしまったと考えられるであろう。フレーベルが表現遊びとして紹介した一連の遊び、「カタツムリ」(das Schnecklein)、「水車遊び」(Mühlenspiel)、「車輪」(das Rad) (Fröbel:1838ab)、「輪の遊戯、星の遊戯、花の遊戯、花冠の遊び」(das Kreis , Stern=, Blumen= und Kronenspiel) (Fröbel:1838ad)、「旅行遊び」(die Wanderspiele) (Fröbel:1838aa)、「純粹な歩行遊び」(die reinen Gehspiele) (Fröbel:1838ae) を見ても、保育者が遊ぶ大人として、積極的に屋外活動をしており、周囲の自然環境が子ども達の生活に溶け込んでいることが理解できる。発表会や運動会が終わると消えてしまうような、大人が設定した一時的活動ではなく、周囲の自然環境が提供した、日々の遊びの中に継続して息づいている活動であること、四季折々の様々なヴァリエーションを持つことが前提となっている。すなわち、柔軟な発想で周囲の環境に関わる

場合に、遊びが自己教育になり、遊具が自己教育手段になる機会が増加すると考えられるであろう。屋外での活動という多様で変化に富む環境があってこそ、室内で遊具で遊ぶという安定した環境が自己教育効果を発揮するわけである。フレーベルが自己教育のための施設をキンダーガルテン（子どもの園）という名称に統一し、屋外での作業や散歩などの自然との関わりを尊重した理由がここにある。

模倣遊びと園庭——他人の気持ちや立場になることで思いやり、やさしさに導く模倣遊びは心の教育と考えられよう。生物や無生物に感情移入する模倣遊びは幼児期特有のアニミズム傾向に準拠している。他のものと自分を混同したり、生命の無い物に生命活動を見たり、話すはずのないものと語り合ったりする、心理学で言う感覚が未分化なために生じる錯覚状態である。しかし、幼稚園教育学の立場では、合自然性に基づく感情移入の状態として幼児期に必要な特性と考えられる。大人にとっては不自然な行為でも、子どもにとっては自然な状態であり、全てのものに感情移入できるのが幼児期とも考えられる。したがって、子どもが先天的に有する全ての有機体と共存する共同感情を検討しなおす必要が生じてくる。キンダーガルテンの時期にある子どもは、イヌやネコなどの小動物に言葉を貸し与えたり、山や石などの無生物に感情を転移できる特質を有している。だからこそ、他人の気持ちや立場になったり、思いやりややさしさの萌芽となりうるのである。言語で語りかけてこないイヌやネコ、草や花であっても、感覚で語り合え、生命のない石や風とも共感することができる子ども達はキリスト者の世界の住人なのであろう。生得的に共同体意識を持ち、共通意識を求める人生を過ごす「人間」(der Mensch)は、なぜ共同体意識を持って生まれたかを自覚することにより「人類」(das Menschengeschlecht)となる。人間は万物という有機生命体における自己の位置を自覚し、万物と自分との関係を理解することにより、他者（生物も無生物も含めて）との共存という使命を知ることで人類となるわけである。幼児期は「共同感情」(das Gemeingefühl)の時期であり、他の人間との同一視傾向、他の生物や無生物との同一化傾向を有する時期であることが重要である。フレーベルが、「人類の使命を達成し、人間の天職を成就するための人間の発達や人間の形成は、(全面的方向に向かって進み、継続して向かうような)絶え間なく、中断することなく、継続するものであり、ある等級から別の等級へと上へ止揚する、細分できない全体になっている。乳児の時期に目覚めた共同感情は、子どもの時期に発展して衝動、傾向となる。衝動や傾向が感情や性質になり、感情や性質は、少年の時期に精神活動や意志活動になる」(Fröbel:1826. b)と記述しているように、キンダーガルテンの時期の共同感情は、万物（人類、生物、無生物）と共存する、人類の使命を果たすための活動力になるのである。

人間が神に創造された万物、「全体生命」(das Lebensganze)の一部であり、人間と万物の関係が「部分的全体」(das Gliedganze)の状態にあることから神の本質が確認できる。労作活動を通し、神の行為を「模倣」(die Nachahmung)することによって真に神を認識し、神の本質

を洞察することができるのである。すなわち、労働と宗教との一致点が労作と言えよう。したがって、「全ての有機体」(das alles Organischen)の生命関係(die Lebensbeziehung)を子どもが模倣することで、万物が神に向かって「生命合一」(die Lebenseinigung)しようとする傾向を「直観」(die Anschauung)することができる。幼児期という直観力の旺盛な時期に、神への生命合一を援助する場所がキンダーガルテンの園庭なのである。

フレーベルの模倣の解釈は汎神論的なシンボルである大宇宙と小宇宙によって、自然と合一する合自然性の思想が基盤となっている。フレーベルは自然から外面的に模倣するのではなく、自然の内面にある発展性(内的自然)を模倣することに着眼した点が特徴的である。フレーベルの自然有機体的思考において、自然が意味する大宇宙は生命体であり、宇宙の一部である生命体の人間は、小宇宙として大宇宙に対立し、大宇宙を自己の内に模倣することで成長することになる。神が大宇宙を創造した行為を模倣することで、自己に内在する小宇宙を大宇宙に同化すること、外界世界という大宇宙との相互止揚作用が、フレーベルの自己教育と考えられる。

マーレンホルツ＝ビュローの回想によると、フレーベルの自然観は「もし、自然が締め付けられずに、自然独自の本質に逆らった方向を望まれないのならば、自然の法則を一般的に認め、特別に価値づけているのであれば、自由な発達を伴う一人ひとりの力の援助や世話をも認め、上手な庭師が植物に対して処置するように、一人ひとりの力を援助し、世話とたならば、人間力の花もより良く成長され得るのです。だが、植物が独自の衝動力によって育つように、人間力もまた独自の練習や努力によって大きくなるのです。外部からの押しつけや接ぎ木だけはあってほしくない」(Bülow:1876)というものであったが、人為的な外部からの刺激を排除する合自然を基盤とする発達論であると考えられるであろう。自然と共存する姿勢で自然に逆らわずに生きること、合自然的に自然と同化するための「生命化」(das Darlebung)の能力を子どもが先天的に持っていることが条件になる。シュプランガー(Eduard Spranger 1882-1963)が、『フレーベルの思考界から』(Aus Friedrich Fröbels Gedankenwelt)の中で、「まず、内面的条件が満たされていなければなりません。家庭は生命の源泉と調和しており、家庭は事物の究極基盤で調和してなくてはなりません。生命の源泉は神、事物の究極基盤は神なのです。各存在は万物の発達段階を神的なものの生命段階として、十分深く、純粹に通過し、各段階で存在の内面的なものを積極的に表現しなくてはなりません。この形成衝動は創造的生活や表現的生活の中で自ずから満たされるのです。既に創造的生活や表現的生活については、子どもの形成力に明らかであり、自然と人間性を伴った生命合一の中で、神的な創造法則が、いわば、もう一度明らかに考察される。労作、人間性における神性の現れの行為による証明が内面的なものの生命化なのです」(Spranger:1953a)と分析しているように、フレーベルにとって、生命化とは形成衝動を表現することに他ならない。単に自然を規範とするのではなく、創造的生活や表現的生活において神のような形成衝動を現すこと労作している状態が自然と合一した人間の状態であり、労作を求める生得的傾向が子どもに備わっているとフレーベルは考えているわけである。不断の創造性を象徴

する神が自然を創造されたのだから、芸術家の精神が作品に反映されるように、神の精神は被造物である自然に反映され、自然の一員である人間の精神にも不断の創造活動として継承されるわけである。神から全てが発しているから、合自然や神へ帰一したいという憧れは後天的に身に付くものではなく、生得的に被造物である人間に組み込まれていることになる。フレーベルは現象的な自然の模倣によって、人間の発展を図るだけではなく、自然の内面的な法則を知ることにより、自然と一体化することで自己の進歩発展を図ろうとしたとも考えられる。自然現象の内面の生命発展を模倣することによって自然が人間を教育するわけである。

造形遊びと園庭——手先が未発達なため、結果として破壊してしまいがちな創造衝動を建設的な方向に向ける素材を用いた造形遊びは手の教育である。少しずつ変化させる積み木や色板の表現遊びは創造的活動衝動を労作意欲にまで止揚する。作業具の一番最初の立体は子どもの身体そのものである。すなわち、動植物の飼育栽培、散歩、リトミック、母と愛撫の歌の遊戯も作業となる。

フレーベルの労作活動は、作業具や作業によって完成する。飼育栽培などの造園作業、板やボール紙の造形、織り紙や切り紙の造形、などの作業で生み出された作品は、両親へのプレゼントになるだけでなく、収穫物や製作物は販売されていた。贈答品や販売物になることが目的ではなく、収穫の喜びや贈られた者の喜びが目的であったことに、労作の意義が特徴づけられる。また、身の回りの事物に関わる創造的活動衝動の結果であったことに、遊びとの結びつきがあったわけである。人も自分も喜びたいという子どもの純粋な気持ち、子どもが生得的に有している遊び心と労作心は、「高尚な精神はしばしば子どもらしい遊びにある」(Gar hoher Sinn liegt oft im kind'schen Spiel) というシラーの言葉を標語にしたフレーベルの目標であったし、遊具に「子ども達の喜び」(Die Freude der Kinder) と銘打ったフレーベルの願いでもあったのであろう。

フレーベルによると、「一般に、人間が創造者と似たことをした時に、初めて人間の創造者を理解するように、創造者が自然において造られた形態を、子どもが自分で造形した時に、子どもも学び、特に、子どもは理解するのです」(Fröbel・Lange:1862b) と記述しているように、神が自然界を創造された行為の模倣として、子どもが造形活動を通して自然環境に関わることは、単に自己の創造的活動衝動を満たすだけでなく、自然から学ぶ行為となる。さらに、フレーベルは「人間が自然を理解するためには、自然がするように、特色ある芸術的方法で、いわば、新たなものを自分から自分の中に創造しなければならないのです」(Fröbel・Lange:1874) と記述し、労作による内面の創造性を自然に則って外面化することで、初めて人間は自己の本質を認識している。したがって、フレーベルにとって、人間が労働したり、創造したり、生産物をつくったりすることは、実は自己の本性或使命を探すことであり、人類の使命でもある。フレーベルが、「労作は内的なものの力強い生きざまとして、人間性の中に見られる神性の現れを生き生きと行動で証明することなのです」(Fröbel・Lange:1863) と記述しているように、神への信仰を現世

において表現するプロテスタントの生きざまとも考えられる。

フレーベルの依拠する同一哲学によると、物と精神とは本質において同一であるから、身体的活動をすることは、精神の器を大きくすることになる。フレーベルは、「精神的作業、精神活動の間に通る外部的作業、むしろ、身体的作業、外部に創出される活動や創作物に対する活動は、単に身体を強めるだけでなく、精神をも完全に凌駕し、精神活動の様々な方向を強める。精神は労作によって生気づける労作浴を（私は労作浴以上によい言葉を示せない）すませた後、新たな力と生命とをもって精神的行為に向かうのです」（Fröbel:1826.c）と考えている。すなわち、労作とは人間が自覚的に自己の内的生命を形成し、表現していく試行錯誤の過程を意味している。

フレーベルにとって、生命化とは形成衝動を表現することに他ならない。単に自然を規範とするのではなく、創造的生活や表現的生活において神のような形成衝動を現すこと労作している状態が自然と合一した人間の状態であり、労作を求める生得的傾向が子どもに備わっているとフレーベルは考えているわけである。不断の創造性を象徴する神が自然を創造されたのだから、芸術家の精神が作品に反映されるように、神の精神は被造物である自然に反映され、自然の一員である人間の精神にも不断の創造活動として継承されるわけである。神から全てが発しているから、合自然や神へ帰一したいという憧れは後天的に身に付くものではなく、生得的に被造物である人間に組み込まれていることになる。フレーベルは現象的な自然の模倣によって、人間の発展を図るだけではなく、自然の内面的な法則を知ることにより、自然と一体化することで自己の進歩発展を図ろうとしたとも考えられる。自然現象の内面の生命発展を模倣することによって、自然が人間を教育するわけである。

ま と め——フレーベルのキンダーガルテンは、Kinder 子どもの Garten 庭という名称のとおり、子どもの庭が大切にされています。一人ひとりの子どもを花にたとえ、一人ひとりの持ち味を生かす環境、（同じように水をやり、同じ肥料を、同じ分量与える花壇ではない）森が親分の樹の周りに灌木が生え、灌木の周りに低木が生え、低木の周りに下生えが集まってできるように、様々な植物が集まって生きている森がキンダーガルテンと言えます。生きている森だからこそ、鳥や動物や虫や魚が住むのです。フレーベルが大切にしたのは異年齢間の縦割り状態の関わりであり、横割りのクラス別に子どもを分けようとは考えていなかったことを論じておくことにする。明治9年に東京女子師範学校附属幼稚園が開設されて以来、クラス別の横割り保育が日本独特の閉鎖的なクラスセクト主義の下に運営されたことは反省しなければならない。本来、幼稚園の保育室は雨の日や天候の悪い日だけ使うものであって、晴れた日や天候の良い日は屋外で活動することの方が多く、だからこそ、キンダー（子どもの）ガルテン（庭）という名称通りに園庭での活動が中心になっていた。蛍光灯の下で、室内の机の上に造った積み木のお城と、さわやかな日差しを浴びながら、木陰や砂場に造ったお城の違いは明白ではなかろうか。東京女子師範学校附属幼稚園の保育室では、一斉に同じ形のお城ができるだけで、何らの創意工夫は生まれませんが、

フレーベルのキンダーガルテンでは、砂山や砂の河、運んできた枝の樹木、虫が住んでいる家など、積み木の街や道路が砂場から広がり、生命が生まれ、他の子ども達との関わりも自然に生じることになる。一人ひとり持ち味の異なる子どもが関わり合い、様々な発達状態にある子ども同士が関わり合うことにキンダーガルテンの存在価値がある。

フレーベルの遊具は、環境が提示する情報を子どもの内界にイメージ化すること、内界のイメージを子どもが外界に表現する活動を援助することを大切にしている。外界の内面化と、内界の外面化という相互作用を媒介する遊具により、自己教育が可能になるわけである。遊具は子どもが有する共同感情に伴う傾向、同一視による共感傾向、模倣する活動による同化傾向、などを有する子どもの特性に則って、外界環境を取り込む媒介手段であると考えられるであろう。外界の内面化に創造的傾向を与え、内界の外面化が表現衝動を満たすことにより、子どもの情操が建設的傾向を持つように調整されているわけである。したがって、子ども自身が試行錯誤の体験を積み重ねること、他者の遊ぶ姿を子ども同士が相互に見ていること、などの自己教育を保証する環境が前提にならないと、フレーベルの遊具は効果を発揮できないことになる。自己教育を保証する環境は子どもが主体的に環境に関わる力に基盤を置いている。子どもが環境に関わる力は屋外での活動により一層拡充すると考えられるであろう。フレーベルの命名した、キンダーガルテン（子どもの園）——日本では幼稚園と訳された——は、名称の示す通り、園や庭という豊かな自然環境による人間教育を意図している。自然環境に関わる中で環境に関わる力（自己教育力）が建設的な方向（生命合一）に調整されるわけである。だが、日本の幼稚園の現状は、園庭が人工的な運動場になっている。また、人工照明と空調された室内の閉鎖空間で設定保育が行われている。子どもの情操に働きかける環境であるとは言い難い。運動場が乾燥した日に舞い上がるホコリを見るにつけ、内分泌攪乱化学物質の心配がつきまとう。環境ホルモンと呼ばれる「内分泌攪乱化学物質」(Endocrine Disruptors, EDs)には微量で作用し、生物濃縮として体内に蓄積したり、母体から子どもに移行したり、次世代に亘って影響する。高度経済成長の名残として、園庭を10cm程度掘ってみると、産業化学廃棄物（白線用消石灰の残土、塗料粉塵、廃棄カドミウム電池、破棄した塩化ビニル樹脂のパイプ破片、使用済みのポリ塩化ビフェニールの容器破片、コンクリート塊）や焼却残骸（キャンプファイヤーやたき火焼土のダイオキシン）、農薬（除草剤、殺虫剤）の他にもガラス破片、錆釘などが広範囲にわたってでてくる。ウサギ飼料に配合されている妊娠抑制ホルモン剤や、アスベストなどの壁面塗料粉塵なども園庭に混入していると考えられる。運動場にクローバーを植え、枯れたクローバーや雑草を刈り取り、瓦礫を処理し続けて約20年、果樹を植え、水場を作って野鳥やチョウチョがくるようになった。日本の幼稚園の運動場は、運動会、サッカー、自転車競争などに使用するため、起伏のない地形、石灰などで固めた、いわば、死んだ土壌、運動以外に使えない空間になっているのではなかろうか。軍事教練の名残として、運動会の存在の見直しが検討されている現在、散策や動植物との関わりが可能な起伏のある園庭にして、子どもの遊び場に返すことが重要である。野鳥が水浴びできる足首までの深さ

の池や川、ブルーベリー、レッドカラント、ミニトマト、イチゴなどの小灌木や、畑や雑草園、保護者がお茶を飲みながら語れる野外テーブル、座って話ができる丘、水遊びができる泥地、ミニログハウスなど、利用価値の少ない運動場から楽しい園庭空間に戻すことを進言したい。だが、日本の幼稚園には動植物が少ないのではなかろうか。鉢植えや飼育小屋などの不自然な環境は、子どもの情操保育に望ましくないと考えられる。親分の樹を植え、大きな樹を中心に果樹や実のなる草を植えることを進言したい。大きな樹は落葉や水分調整をして周りに森を作り、小動物が生息できる環境を整える働きをする。動植物の生態系が調和された姿が観察できる森によって、失われていく自然との共存の道が残されることになる。なにより、雑草を植え替える姿、観察した小動物を周辺の自然環境に戻す姿を見ることに生命をテーマにしたフレーベルの精神、自然環境による情操保育の場が開けると考える。

最後に、本論文のまとめとして、フレーベルの遊具を屋外でも使うことを勧めたい。ヒルの考案した大型箱積み木を遊戯室から屋外に持ち出し、木陰の下や池の側に家を作ったり、第3遊具から第6遊具を砂場に持っていき、砂場に積み木の城を作ったならば、山や河、道路や町などが自然にできてくる。狭くて暗い教室で保育者の指導で一斉に作る家や城と比較して、どちらが子どもの情操に働きかける造形活動かは明白であろう。飼育小屋に監禁されている小動物ではなく、園庭で生活している動物達と関わる環境、花壇や鉢植えのような不自然な植物ではなく、園庭を生活圏としている動植物達と関わる環境の中で使うフレーベルの遊具には、生命が宿ると言っても過言ではなかろう。

引用文献

- Bertha Marenholtz=Bülow:1876:*Erinnerungen an Friedrich Fröbel*:In:*Gesammelte Beiträge zum Verständnis der Fröbel'schen Erziehungsidee* Band 1:Georg H. Wigand. Kassel: S.30. Z.42-S.31. Z.7
- Friedrich Fröbel:1826:*Die Menschenerziehung, die Erziehungs=, Unterrichts=und Lehrkunst, angestrebt in der allgemeinen deutschen Erziehungsanstalt zu Keilhau; dargestellt von dem Stifter, Begründer und Vorsteher derselben, Friedrich Wilhelm August Fröbel. Erster Band. Bis zum begonnenen Knabenalter*:Allgemeinen Deutschen Erziehungsanstalt. Keilhau:Commission bey A. Wienbrack. Leipzig:a.S.42. Z.1-S.43. Z. 4:b.S.115. Z.14-Z. 23:c.S.298. Z.27-S.299. Z.8
- Friedrich Fröbel:1838a:*Bewegungsspiele, als ein Ganzes aus dem Leben und Spielen des Kindes entwickelt*:In: *"Kommt, laßt uns unsern Kindern leben!"*. *Ein Sonntagsblatt für Gleichgesinnte und unter thätiger Mitwirkung derselben*:Nachlaß Friedrich Fröbel:Friedrich Frobel Museum. Bad Blankenburg:Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit:II Band No.23. 1838 und 1840:a.S.181. Z.11-S.187.

Z.27: II Band No.24. 1838 und1840:b.S.187. Z.37-S.194. Z.68: II BandNo.25. 1838und1840:
c.S.197. Z.13-S.207. Z. 49:d.S.193. Z.1-S.194. Z.84:e.S.195. Z.61-S.197. Z.12

Friedrich Fröbel:1838b:Der Ball, das erste Spielwerk der Kindheit:In: *"Kommt, laßt uns unsern Kindern leben ! "*. Ein Sonntagsblatt für Gleichgesinnte und unter thätiger Mitwirkung derselben:Nachlaß Friedrich Fröbel:Friedrich Fröbel Museum. Bad Blankenburg:Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit:No. 5. Am 28. Januar 1838:S.34. Z.56-Z.67

Friedrich Fröbel:1838c:Die Fortentwicklung des Kindes und das sich entfaltende Spiel mit dem Balle:In: *"Kommt, laßt uns unsern Kindern leben ! "*. Ein Sonntagsblatt für Gleichgesinnte und unter thätiger Mitwirkung derselben:Nachlaß Friedrich Fröbel:Friedrich Fröbel Museum. Bad Blankenburg:Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit:No 19. Am 6. Mai 1838:S.148. Z.58-S.151. Z.22

Friedrich Fröbel:1838d:Die Kugel und der Würfel. Als zweites Spielzeug des Kindes:In: *"Kommt, laßt uns unsern Kindern leben ! "*. Ein Sonntagsblatt für Gleichgesinnte und unter thätiger Mitwirkung derselben:Nachlaß Friedrich Fröbel:Friedrich Fröbel Museum. Bad Blankenburg:Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit:No 11. Am 11. März 1838:S.84. Z.29-Z.51

Friedrich Fröbel:1850a:Das Kinder=, Jugend= und Volksfest zu Altenstein bei Bad Liebenstein in Meiningen am 4. August:In:*Friedrich Fröbel's Wochenschrift. Ein Einigungsblatt für alle Freunde der Menschenbildung*:Nachlaß Friedrich Fröbel: Friedrich Fröbel Museum. Bad Blankenburg:Der Kinderbeschäftigungs Anstalt, früher in Blankenburg, jetzt in Bad Liebenstein bei Eisenach:Nr. 31. & 32. Montag, den 5. & 12. August 1850:Nr. 33. & 34. Montag, den 19. & 26. August 1850:Nr. 35. & 36. Montag, den 2. & 9. September 1850:Nr. 37. & 38. Montag, den 16. & 23. September 1850

Friedrich Fröbel:1850b:Der Garten für die Kinder im Kindergarten:In:*Friedrich Fröbel's Wochenschrift. Ein Einigungsblatt für alle Freunde der Menschenbildung*:Nachlaß Friedrich Fröbel:Friedrich Fröbel Museum. Bad Blankenburg:Der Kinderbeschäftigungs Anstalt, früher in Blankenburg, jetzt in Bad Liebenstein bei Eisenach:Nr. 15. Montag, den 15. April 1850:S.113. Z.33-Z.39

Friedrich Fröbel·Wichard Lange:1862a:Die projectirte Volks= Erziehungs= Anstalt zu Helba bei Meiningen:In:*Aus Fröbel's Leben und erstem Streben. Autobiographie und kleine Schriften*:In:*Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften* Band 1:Th. Chr. Fr. Enslin. Berlin:S.408. Z.24-S.409. Z.13

- Friedrich Fröbel·Wichard Lange:1862b:Plan der Elementarschule und Ankündigung einer Erziehung= Anstalt im Waisenhouse zu Burgdorf:In:*Aus Fröbel's Leben und erstem Streben. Autobiographie und kleine Schriften*:In:*Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften* Band 1:Th. Chr. Fr. Enslin. Berlin :S.484.Z.11-Z.14
- Friedrich Fröbel·Wichard Lange:1863:Erneuerung des Lebens fordert das neue Jahr 1836:In:*Die Menschenerziehung und Aufsätze verschiedenen Inhalts*:In:*Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften* Band 3:Th. Chr. Fr. Enslin. Berlin:S. 520.Z.1-Z.3
- Friedrich Fröbel·Wichard Lange:1874:Vortrag, gehalten in Gegenwart Ihrer Majestät der Königin von Sachsen, zu Dresden im Zwinger= Pavillon den 7. Januar 1839:In:*Die Pädagogik des Kindergartens. Gedanken Friedrich Fröbel's über das Spiel und die Spielgegenstände des Kindes*:In:*Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften* Band 2:Th. Chr. Fr. Enslin. Berlin:S.226.Z.35-Z.37
- Friedrich Fröbel·Johannes Prüfer:1911:Mutter= und Koselieder:Ernst Wiegandt. Leipzig: S.63.Z.38-Z.42
- Hermann Pöschel:1862:*Friedrich Fröbel's entwickelnd= erziehende Menschenbildung (Kindergarten=Pädagogik) als System. Eine umfassende, wortgetreue Zusammenstellung*:Hoffmann und Campe. Hamburg:a.S.447:b.S.442.Z.18-S.446.Z.32:c.S.449
- Kurt Schrücke:1912:*Louise Fröbel. Fröbels Zweite Gattin*:Fröbelhause. Thüringen:S.32. Z. 32-S.33. Z.4
- Eduard Spranger:1953:*Aus Friedrich Fröbels Gedankenwelt*:Quelle & Meyer. Heidelberg:a. S.33.Z.5-Z.15:b. S.12. Z. 23-Z.28